■淫魔に憑かれた少年を保護するつもりが逆に調教されるヤエ・ユイの話

　秘密特捜忍者であるヤエは今日も世を乱す悪を追っていた！
　今回の任務は人に憑りつく能力を持つ物の怪の駆除。早速現場に赴き、物の怪を斬り伏せていくヤエだったが……
「……キミ、大丈夫？　もしかして、もう既に……？」
　現場に居合わせた少年がうずくまり、僅かながら妖気を発している。
　どうやら一足遅く、少年に物の怪が憑りついてしまったようだ。
【だ、大丈夫……ぅっ……！】
　ヤエを見た少年は高熱を帯びたように赤らみ、呻きと共に服の裾を掴んで股間を隠す。
　どうも悪いことに、少年に憑りついたのは淫魔――性欲を増長させる類のものであったようだ。
　憑りついた妖魔の力はさほど強くはなく、症状は深刻ではない。とはいえこのまま放置するわけにはいかず、除霊処置が必要となる。
　ヤエは間に合わなかったことに責任を感じ、除霊師のいる京まで少年を連れていくことを決めるのであった。
「その……苦しいかもしれないけど、京に着くまでの間の辛抱よ。がんばろうね！」
【う、うん……！】
　よりによって、男性に淫魔が憑いてしまった。対処に少し困るが、不幸中の幸いか、被害者はまだ若く、性知識もあまりないように見える。故に自身の肉体に起きている異変もどういう意味か分からず困惑しているようだが、これならば衝動に駆られて女性を襲う、ということもないだろう。
　暴走する危険性もあるが、なんにせよ早く治療する必要がある。ヤエは苦しそうにする少年を時折明るく優しく励ましながら、少年と共に道中を進んでいく。
◆
「ああもう、こういう時に沸いて出るんだからっ！」
　宿に着くまでの道のり。あまり物の怪が出ない道を選んでいたのだが、それでも出る時は出る、出て欲しくない時に出るのが奴らだ。
　少年とヤエの前に突如現れた妖魔たち。それをヤエは高速で移動しつつ忍刀で薙ぎ払っていく。
　一体目。ヤエは袈裟斬りし、動きの弾みで胸をぶるんっと揺らしつつ撃退。
　二体目。素早く飛び掛かり、上段蹴り。短いスカート状の忍衣装が捲れるが気にしている場合ではなく、遠慮なく脚を振り上げて撃退。
　次々と、挙動の一つ一つが少年の眼には毒になるとは露知らずに動き回り、ヤエは妖魔を駆逐していく。特捜忍者の圧倒的な実力に十体近くの妖魔が撃破されるが……流石に一瞬、僅かな隙が生まれる。そこを妖魔の最後の一体が狙い、せめて一矢報いんとヤエではなく少年へ向けて、ツル状の触手を放った。
「っ?!　危ないっ！」
　それに対し、ヤエは咄嗟に少年の前に飛び出すことで少年の身を守る。庇う直前に投げ飛ばした刀が最後の一体に突き刺さり、妖体が消滅。何とか少年を無傷のまま戦闘を終わらせることに成功する。
「大丈夫だった？」
【うん。それより……ごめんなさい、ボクのせいで……】
「いいのよ、傷もはないから。……あ、でもこれ、絡まっちゃってる……ごめん、ちょっとほどいてくれるかしら？」
　妖魔の執念か、ツルが思った以上に絡まってしまい、自力でほどけなくなっている。助けたお礼に、ということにして、少年にほどいてもらうように頼んでみたのだが……
【ちょっと待ってて。すぐほどくから……】
（気のせいかしら、息が荒くなってるような……あっ！）
　妙に荒くなっている少年の呼吸。それは戦闘を目の当たりにしたからだと思っていたが、ヤエは少年の目線の先を辿って興奮の原因を知る。
　ツルはただ絡まっているだけでなく、その絡まり方がどこか厭らしく、ヤエの肉感を強調していたのだ。
　戦闘員として本来は不向きな胸乳の間に潜り込み、押し出すように絞り上げている。更に股も潜って股間を引き上げ、下着が僅かに見えてしまっている。
　ただでさえメリハリのついたヤエの身体を妖艶に彩っている今の状態に、ツルをほどくために密着寸前まで肌を近づける。性に疎い少年であろうと興奮してしまっても無理からぬ状態であった。
（まあ、少しくらいは、そうなるわよね……男の子だし。でも、この子なら大丈夫……よね……？）
　淫魔に憑かれてなくとも、成人男性なら理性を失いそうな状況。僅かに危機感を覚えるヤエだが、それでも少年の純粋さを信じ、最後まで見届けていく。
　そして最後、少年は掴んだツルを引きちぎる。その際の手の動きは、ヤエの胸に触れるかどうかというものだったが、これでヤエは無事解放されることとなる。
【これで、大丈夫……？】
「ええ、ありがとう」
（今の……わざと？　いえ、そんなわけ……たまたま……気のせい、よね……？）
　仮にも淫魔に憑かれ、興奮状態にある男性。様子を窺うが、しかしそれ以上に不審な点もなく、ヤエは少年を信じて注意等をすることなくそのまま宿へと向かうことにした。
◆
　その後、事も無く宿に到着。本来なら男と女、部屋を分ける方が望ましいのだが、不安定な状態で放置するというのも危険であり、念押しに見張る必要がある。そういうわけで、姉弟という体裁で相部屋にして同じ部屋で寝泊まりすることになった。

（いくら何でも、寝こみを襲うなんてことしないわよね……そもそも、そんな知識もないでしょうし）
少し憑依状態を楽観視してはいないかと自問するヤエだが、現在判明している少年の症状は軽度の発熱のみ。早く寝るように言い聞かせるとすぐに寝静まり、やはり無垢な少年であることを確認する。
あとはこのまま暴走しないように見張り続けるのみ。少年を視界に捉え続けたまま、寝ずの番を決め込むヤエ。
……しかし、こんな日に限って、不自然なまでに眠欲が旺盛になる。平時であれば、一晩くらい寝ずに済むよう訓練しているのだが……。
（戦闘とか、あったから……かしら……？　気を付け……ない……と……）
自分に言い聞かせるが、それでも不思議と抵抗しようのない眠気が全感覚を包んでいく。
そして遂には任務のことも意識から薄れ、少年の隣で床に臥してしまう……。
◆
【ヤエちゃん、眠いの？】
「んぅ……そうみたい……」
【疲れてるのかな？　もしかしてボクのせい？】
「キミのせいじゃないわ……でも、少し……疲れが、溜まってるのかも……」
【じゃあ、ボクがマッサージしてあげるよ。そうすれば疲れも取れるんじゃない？】
「そう、ね……お願い、しようかしら……」
布団の上にうつ伏せになったヤエ。彼女に疲労を見た少年の申し出に素直に答えると、少年がヤエの腰上から跨った。
（あれ……？　マッサージなんてしたら、気持ちよくなって、余計に眠く……）
「はぅう……」
一抹の不安を抱くも、腰部にしっとりとした指圧を受けると心地よさが唇から漏れる。少年の若さが残る身体は適度に軽く柔らかく、ぬるま湯のような快感をもたらしたのだ。
「あっ……んっ、んふぅ、そこ、おっ……ほぉぉぉ……♥」
ぐっ、ぐっ、と体重を乗せた圧に、色気を含ませたような声が出てくる。羞恥に赤らむが少年からすれば善意からの行動。直前に受け入れたため拒否などすぐにはできず、そのまま背、肩部と圧を受けていく。
（何で、こんなに……気持ちい……。やっぱり……疲れてるの、かしら……あっ……！）
まさに夢見心地。若い手によるものとは思えぬ恍惚感も束の間、少年の指が再び下腿へ戻り、尻の割れ目の頂点付近に触れた。
「そ、そこはいいから……ね……？」
【？　尾骨とか押しただけだよー？】
「あの、ね……えと、そういうところは、やらなくても……」
【いいからいいから♪】
「ま、待って……はひっ……♥」
純粋過ぎるからか全く悪びれず、更に下方へ圧をかけていく。
「ふはっ♥　ん、そこ♥　そこは、待っ♥　て……～～っ♥」
（これ……こんなの、ダメよ……叱ってでも、止めないと……！　でも、良かれと思って、やってくれてるし……気持ち……いいし……っ♥）
いつの間にか少年の指圧部は大胆になっていき、ただの按摩とは思えない域になっていく。尻肉を掴むように揉み上げ、捏ね、割れ目に沿って指を這わせ、また尾骨を押し、側部をくすぐる。
更にあろうことか、少年の指は肛門と性器の間、会陰にまで到達。何の躊躇もなくそれまでと同じ按摩の要領で押し込み、コリコリと刺激を続ける。
「ダメ……そこ……は♥　っ♥　ぁぁぁぁ……っっ!!♥」
【そんなに気持ちよかった？　もっと強くした方がいいのかなぁ？】
もはや按摩と称した、性交前に行う前戯に類する愛撫。しかし何故かヤエは上手く抵抗できず、金縛りにでもあったように受け入れてしまう。
少年はどこか嘲笑じみた声の後、遂に手を股間の前側……陰唇へと宛がった。更に反対の手も胸元へ潜り込ませ、汗ばんだ胸乳と布団の間を潜らせるや、的確に指先で乳首を捉えると、乳房ごと乳首を、同時に陰唇全体を揉みしだいた。
「あっ♥　ダメよっ!♥　そんなっ……とこ……やめな、さいぃぃぃっ!!♥」
声を強めるが、ここまで来て愛撫が緩められるわけもない。本格的な快楽のための愛撫に、いつの間にか汗以外の体液で滴った股間。牝としての本性が覗いた部分を揉みほぐされ、熱気に塗れた肢体がビクンッと跳ねる。
（嘘……！　こんな子に、触られただけで……っっ!!♥）
「い……く……っ!!♥　っはぁぁぁぁ……――――っっ!!♥♥」
◆
「っ!?　ぇ……？」
少年のマッサージによって絶頂に達した……というところで、ヤエは目を覚ます。
不覚にも床に就いてしまっていたようだ。しかもあろうことか品のない夢まで見てしまっていた。
（夢……？　でも、妙に感覚が現実的で……!?）
目を覚ましてなお、まだ夢の続きにいるように頭がぼんやりとする。そしてうつ伏せになった自分に圧し掛かる重量感。肌に触れられる感触、昂ぶる性感。それらを改めて感じ、現実でも夢と同じ状況になっていることに気付く。
「こ、ら……！　何、してるの……っ？」
【あ、やっと起きたー？　ヤエちゃん疲れてるみたいだから、マッサージしてるんだよ。気持ちよかった？】
夢と同じく、無邪気な笑顔で前戯と変わらない按摩を続ける少年。おそらくマッサージをされたあたりからは、身体は睡眠状態ではあったもののほとん

ど現実だったようだ。
　実際にヤエの肉体はじんじんと火照り、絶頂した直後の感覚が残っている。羞恥と混乱に襲われるが、問題はここまで触れられていながら気付けなかったこと、未だに身体に力が入らず、心に覇気が戻らないことだ。
（まさか……もう既に、淫気が、侵蝕しているの……？）
　いつも発揮できるはずの注意力が失せ、不自然に高揚して性感を許容する。典型的な淫気が侵蝕したことによる現象だ。
　おそらく少年を寝かせた時点で、既に少年の中で淫魔の力が覚醒していたのだろう。
【気持ちいいよね？　こんなに濡れ濡れだし】
「そ、そこっ……触っちゃダメよぉっ♥」
　就寝前とは思えないほど積極的になり、余裕綽々にヤエの秘部へ触れる少年。一体何故、淫魔が急に覚醒したのか……その疑問に答える形で少年が思いの丈を晒す。
【だってヤエちゃん超エロいもん、仕方ないよね。何もしなくてもエロいのに戦う時もいちいちエロいし。それに一緒の部屋に泊まるってことはヤエちゃんもこういうの期待してたんだよね？】
「違っ……そんなこと……っ」
　どうやらヤエは少年の純粋さと自らの美貌を見誤っていたようだ。いや、いくら清い心を持っていようと、やはり雄は雄、ということか。密かに抱いていたヤエへの性的本能が、本人の自覚を問わず淫魔の力を覚醒させたのだろう。
　こうなってしまえば、もう力で以って拘束し、無理矢理にでも除霊師の元まで連れて行かなければならない。切迫した事態に四肢へ危険信号を送るが――
【すごいぐちょぐちょになったね。お風呂入ろっか】
「ま、待ちなさい……！　キミ、今……淫魔に、操られ……」
【いいから……ねっ？】
ぐちゅぐちゅぐちゅぅっ！
「ひぃっ！　わ、わかった、わかったからっ……ぁはぁぅっ!♥」
（こ、こんなに淫気の侵蝕が早いなんて……！　ダメ……抵抗できない……！）
　股間を持ち上げるようにして一層激しくかき乱され、雄に伏する牝の本能で思わず言いなりになってしまう。
　この瞬間、ヤエは淫魔に従属する一匹の牝と化したのであった。
◆
　宿近くの風呂屋。少年に言われるまま、ヤエは外套を被り身分を偽り、二人して男湯へと入っていた。
　成人した女の身で男湯に入ることに抵抗がないわけがない。しかし少年が発する淫気はヤエに御しきれるものではなく、今では軽く触れられるだけで、指示されるだけで、本能反射で気付けば靡いてしまうのだ。
（お、大人になって、男湯だなんて……！　正気じゃないわ……！）

　体験版はここまでです。続きは製品版で！